

本朝月令との云い伝えをものに相似があり、歌詞も似ているところから「続日本記の記載は古事記雄略天皇のこの条の作り変へである」(古事記伝)とよんでいる。又、琴歌譜には「短埴安扶理」の歌として「嬢子ども嬢子さびすと唐玉を手本に纏ぎて嬢子さびすも」の歌を掲げている。これは月令の歌と才二句が「平止女佐比須止」となつて「止」の一字が違うのみである。いずれにしても音楽舞踊の起源を語るものとしてその道の人々に尊ばれ受けつがれた歌であると思われる。

雄略天皇を中心とする歌物語の中で、萬葉の卷頭長歌が赤猪子の物語と結びつき、更に袁村比売の話と何らかの關係があると見られる事は一応云えると思う。この様に種々の形に姿を変えた求婚話が主として雄略天皇に結びつけられ、その物語を潤色せしめた原因は天皇の御名を永久に伝えるためにおかれた長谷部、長谷部舍人等の御名代が大いに榮えたということの他に、語部の関子という事を考慮しなくてはならないが、それにもまして妙なる音楽に合わせて、長い美しい袖を翻して舞ううら若い美女の姿は覚めることなく、永遠に続く夢の世界であつて欲しかつたのであろう。これら民謡的なもの、或いは何者かによつて為された一般的感情の表白が、その内容から雄略恋物語にくり入れられたのではないかと思われる。ここに古事記を貫く抒情の流れを見る事が出来、又、上代歌謡の本質の一端を

も伺う事が出来ると思うのである。

## 助動詞「ぬ」に関する一考察

三年 中 村 楷 子

岩波文庫本「源氏物語」と明治書院本「新編平家物語」の中から、助動詞「ぬ」を百例に限つてとり出した結果を考察してみた。なにぶん操作の範囲が狭く、不確実なうらみもあつて、かりにもレポートなどと云はれるものではない。

中西宇一氏は「発生と完了―ぬとつ―」(「国語口文才二七六号」所収)において

「ぬ」は状態の発生を示す

と述べられたが、私は助動詞「ぬ」を総て状態の発生であると思つてしまふ事は無理ではないかと思ふ。

- 1 宮は大殿籠りにけり (源氏桐壺)
  - 2 夜も更けぬ (源氏桐壺)
  - 3 女御も御心おちる給ひぬ (源氏桐壺)
  - 4 嵐吹き添う秋も来にけり (源氏帯木)
- 氏のお考えにそくして解釈すると、例①は、過去の或る

れた一般的感情の表白が、その内容から雄略恋物語にくり入れられたのではないかと思われる。ここに古事記を貫く抒情の流れを見る事が出来、又、上代歌謡の本質の一端を

一定の時に大殿籠(り)の状態が発生し、引き続き今も宮はおやすみになつてゐる。例②は、今は夜が更けた状態になつてゐる。例③は、今は女御も御心おちおち給ふ心理状態になつてゐる。例④は今もやはり秋の状態が續いてゐるとなり、眼前の状態が発生した事を示すと云われるのである。

(同じ用法の用例は百中三十八例) 然し一方

1 色にも出させ給はずなりぬるを (源氏桐壺)  
2 横ざまなるやうにて終にかくなりはべりぬれば……

(源氏桐壺)

3 哀れ進みぬればやがて……

4 過ぎぬるは甲斐なくて……

5 ……奇しからむとて皆笑ひ給ひぬ

6 丑になりぬるなるべし

(源氏桐壺)

右の用例中の「ぬ」は、明らかに状態の完了或は、完了の結果を示している。①②③の用例の「ぬ」は、或る状態がだんだん進行して、その時まで一定の極限に達した事を表わしてゐて、状態の発生とは考えられない。五の用例の「笑ひぬ」も笑つたと云う事実は、すでに今より前に行われてしまつた事であつて、同じ状態が続いて二度発生する事は予想出来ない。しかもこのような「ぬ」の用法が百の用例中、約半数の四六例もあるのである。次に

玉の男御子さえ生れ給ひぬ

(源氏桐壺)

夜中打ち過ぐる程になむ絶え果てぬる

(源氏桐壺)

4 嵐吹き添う秋も来にけり

(源氏桐壺)

氏のお考えにそくして解釈すると、例①は、過去の或るすがすがしうも思ひたゞざりける程に后も亡せ給ひぬ

(源氏桐壺)

亡せ給ひにし御息所……(その他三例) (源氏桐壺)

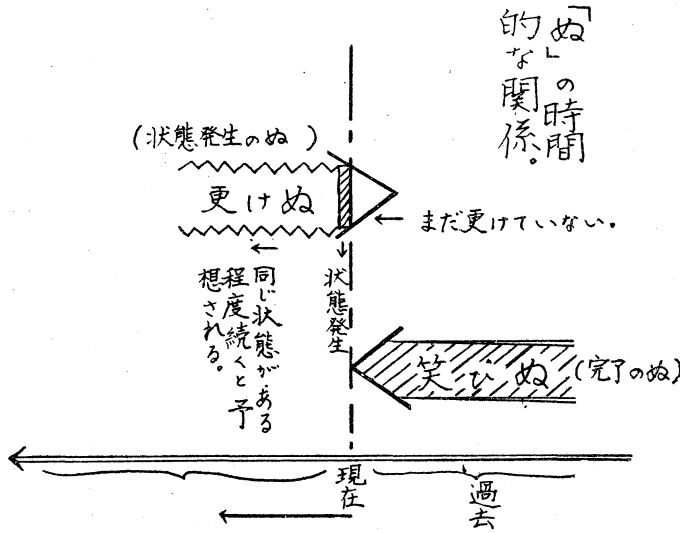
等操作の範囲内に於て、生死に関する状態描写には全部助動詞「ぬ」を用いてゐる。生死の現象は一回限りのものであつて継続的なものではないから「ぬ」の完了性をはつきり示す用例として興味深い。ところで両者の時間的な関係はどうであらうか。状態の発生を示す「ぬ」は「籠りぬ」にしても「更けぬ」にしても、その状態が発生してから、時間的に比較的長くその状態が発生した時と同質の状態を保つていく性質を持つてゐる様である。最も卑近な例として

花咲きぬ

と云つた場合には、花が咲いてゐる状態が眼前の事実である事は勿論、その花は、比較的長く、これから先も咲き続けるものと予想されるのである。したがつて「ぬ」が「籠る」、「更く」、「咲く」等の如き、言葉自身の中に、時間的な幅を持つたものに接続した場合にのみ、中西先生の説は妥当である。然し、前述の「ぬ」の用例中には、現在以前において現れた状態が、現在、もしくは、現在の近くで完了したり、一定の極限に達したりする意味に用いられてゐる事実が多数ある事からして、先生が「ぬ」は状態の発生を示すと云われているのは、むしろ、助動詞「ぬ」の

性質の一面として考えた方がより正しいのではないだろうか。

一 入道、内府に申違うては悪しからなん（キツト悪カロウ）とや思はれけん（平家）



二 今年の軍には違なく勝ちぬ（キツト勝ツ）と覚ゆるぞ（平家）  
等の用法のある事も一考しておく必要がある。

## 接頭語と接頭辞の一考察

三年 福山 布威

従来、接頭語、接尾語と言われるものの中には、意味上又は現在の言語意識等から考えて、語と呼ぶにふさわしくない種類のものがある。それを接頭辞、接尾辞として接頭語、接尾語と区別する説に基いて、一応の考えをまとめてみたいと思う。ここでは紙面が限られているので、接頭語、接頭辞の方のみを取り上げることにする。

例えば、接頭語と言われているものの中には、「御迷惑」「おみ足」「ご霧」「小暗い」「打ち興じる」「立ち勝る」「ぶつ倒れる」「こころさい」「か細い」「み空」等の種類の語と、「お寺」「さまよう」「おみき」「たなびく」「御飯」「令息」「す足」「生糸」「まつすぐ」「まつか」「小川」等の種類の語とを、現在の言語主体の意識によつて分けることが出来る。前者は「御」「おみ」「ご」等が